

## 農と食のコラム～震災復興特集③～

## 「生きる力の再発見」なる復興支援

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄—

東日本大震災後、4年が経過するが、復興が容易ではないことを痛感すると同時に、被災地のために何もできない自分に正直、もどかさのようなものを抱き続けてきた。

筆者は仙台の出身であり、子どもの頃、三段に重ねたアルミのかごを背負った、「五十集（いさば）」とも呼ばれる魚を行商する“サメばんつあん”が毎週のように家に出入りしていた。昼時に魚を売りに来た時は、よくわが家の縁側に腰を掛けては、祖母と世間話をしながら弁当を食べていたのを思い出す。その“サメばんつあん”は閑上（ゆりあげ）近くの浜から来ていたように記憶する。

閑上は名取川の河口にある漁港で、赤貝の漁獲で知られてもいた。名取川やこれと交差するように海岸と併行して走る貞山堀の土手の風景は大好きで、父のスクーターの“ケツ”に乗ってはよく魚釣りに出かけた。また夏の花火大会や灯籠流しでにぎわう町の情景も忘れることができない。

震災後、訪れた閑上の光景には絶句するのみ。にぎやかだった漁港、これに続く商店街も何もかにもが流されて、荒涼とした平地が広がるだけ。人口5600人の町で

750人が亡くなったという。

筆者の小学校時代の恩師の奥様はこの閑上の出身である。その奥様から『「閑上」津波に消えた町のむかしの暮らし』なる冊子が届いた。奥様はみやぎ民話の会の会員で、それまでにも聞き書きした民話をとりまとめた本や冊子をお送りいただいていた。奥様は民話の仲間と共に、「消しゴムで消されてしまうように、閑上の町は地図の中から消えて」しまいかねない。「新しい町の復興を担う次世代の方たちにとって、何かの力の源」になることを願って、「郷土史や土地にまつわる記録ではなく、ここに生活を築いてきた人たちの姿、普通の人たちの生活の風景や、人々の息遣いが聞こえるような記録」を残すことにより、「何世代にもわたって脈々と受け継がれてきた、この形のない、心の遺産」そして「閑上の個性を、次の世代へ、しっかりと受け渡して」いこうとしたものだ。

この冊子では元漁師を含めて、閑上に生まれ育ち、閑上を愛し、閑上の発展のために尽くしてこられた10人の方たちの話を引き出し、閑上の町の様子、漁師としての体験、漁師独特のしきたり等について生き生きと語られている。大漁



蔦谷 栄一（つたや えいいち）

〔主な経歴〕

東北大学経済学部卒業、1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長、常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表

〔主な著書〕

「地域からの農業復興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）など

旗を掲げた船が並ぶ港の雑踏が思い浮かんでくる。さらには飛び交う元気で荒々しい漁師言葉が響いてくるとともに、臭いまで漂ってくるような感じがする。

あとがきは『「復興」という営みは、なにか新しいものを生み出していくことではなくて、遠い先祖から脈々と続いてきた、人々の暮らしと、生きる強い力を、限りなく再発見していくことではないのか、と。そこからこそ、ほんとうの『復興』がはじまるのではないかと結ばれている。

本書を読んで心打たれたことは多いが、その内容とは別にこうした復興支援の仕方もあることに不思議な感動を覚えた。年の功があってこそその支援・貢献。「復興」への思いは深く、そして鋭い。

[＜表紙・目次へもどる＞](#)